

ケネス・コッホの「我々の心」

(Kenneth Koch's "Our Hearts")

- I. 「我々の心」全訳
- II. ケネス・コッホ小考

森 田 孟

I. 「我々の心」“Our Hearts” 全訳

1

卓傳⁽¹⁾の交響楽団が『愛』を演奏すると、あらゆる心はどきどきする筈だ、そしてそれからあらゆる足が踊り出そうとして動き始める筈だ。その踊りは甚だ早くなり ステップは皆 軽やかになる筈だ。誰もが皆 心をどきどきさせながら動き回っている筈だ——
タッ、タッ、タッ、タッ。心臓は実際は、いつもずっと鼓動しているそれも殆ど同じ強さで。違いは我々の聴覚にあるのではない殆ど常に 同じに聴こえるのだから。違いが生ずるのはだから我々の意識の中でに相違ない。意識は変化に富んだものだそうだから。黒白の靴、赤い服、炎となった眼、真珠の歯、きちんとした長ズボン、沸き立つ生命。踊りませんか？ 興奮、とまあ、そういうことになる、いつも。そういう時にはいつも 人間の天性が現われるのだろうか。夢から類推するともいうのも恐らく我々は毎夜、夢を見ているからだ、人は言いたくなる、そういう心の沸き立ちは常に生じ、それと共に偉大な芸術は可能になるのだと。

2

制御は常に存在する、というより実際は人々が

まず苦闘し、それで制御が生じて感情が圧倒的なものにならないようにしようとする。芸術が本当に生まれて感情が沸き立つ時、正義が最もよく行なわれる時、そういう時に常に私は生きていたい。家々が現われると産業が、そしてそれから人々がすると政府が、その産業を支配しなければならない。家々に全く煙が立たなくなる。

するとこのことをずっと調査する人々が現われ
経済学者や政府役人、そういう彼らが坐ったり歩き回ったり
して こういう事を調査する。そしてそういうことでもなければ他と区別のつ
かない少年

少女たちの中から科学者になるものが現われてこういう事柄を複雑にし、
一層よくしたり悪くしたりするし、また他の青ざめた頼りなきような連中が
現われて詩を書いたり絵を描いたりし、そして全ては死に、
また新しい人々が生まれ、歴史や文化や
文明になり、そして文明が死に、そして文明がそれも文明の中に、生まれるの
だ。

3

我々、その中に生まれた者は、その中を歩き回わり、こういう物を見、
こういう事について考える。一義的なものもあれば二義的なものもある。
誰もまだ我々の頭脳を完全には理解していないが
試みている人はいる。まず最初には、我々は「満足な」状態になろうとすること
だ、

うまくやろう、成功しようとする事だ。これが全ての人間の頭脳に生ずること
なのか

(我々はそうは思わないが) それともただ我々の文明が考えることなのかは
確かではない、いや余り気にかけない、が、とにかく我々はそれによって行動
する。丁度我々が

たまたま生まれ合わせた時の倫理によって行動するように (例えば、祖父母を
食べたりしないように、

エジプト人はそれを当然と考えていた、と ヘロドトスは語っているが)。
そしてほんやりした 目も眩むばかりの青春期の舞踏場で我々は一步踏み出す

のだ。

後に、恐らくずっともっと後に、我々はそれを理解しようとする——

さもなければ時々ただ、機械的に、一面だけで考え始める。

「愛して」いることに気付くと、我々は至高の価値を付与するかも知れない、

それに、

あるいは何か狂熱的な宗教に、そしていつの間にか日没に教会に出かけていることになる。

4

何によって実際、それは、説明できると思うのか、この

自然の過程で創り上げられてきた神秘は、

また、それをどれ位、我々は必要としているのか。誰もの足が前進してゆくと

誰もの膝は曲がる筈であり、脚は踊り

唇は陽気に歯の上で動いて

話をしようとし、両手はポケットに入り込み、眼は輝き、

爪先をぶつけても忘れてしまう、ええい、本当にあなたに会えてよかったよと

言いながら

どこか他所へ歩いてゆけば。でも我々はどうしよう。最大の計画は

参加し、援助し、理解することだ。誰の足元にも

犬はいるべきだ。何たる証拠をこの過去は我々に与えてくれることか！ 例証

なら

今日我々には一杯ある。だがワイシャツはびったり合うべきだ

胸の上に、軽快な絹のパンティーは臀部に。

空は輝いている。太陽は洗濯物の籠で

我々の肌のために降ろされたのであり、微生物は現金のように我々の周囲到る

所にいる。

5

自然界には何の説明もない。都市には何ら

説明はない。言語には何ら

説明はない。説明は犬であり、物思わし気な若者で

痩せて けばけばしい双眼鏡を持った すさんだ様子をしている。私は坐っており君は立っている。我々には善悪は分かる。私はどっと疑いを表わし、才能を発揮しているのだ。私は到る所を見回わす。私はいつだって嬉しい、何か単純なものを見出すと。呼吸は単純、歩行も単純、舞踏も、時には足を動かすことも。物事が単純だという単純な言い方は途方もなく楽しいものだが、それは説明ではない。人々はどっと突進すべきである。そうしても何ら問題はない。ただ、問題は、どうすれば参加 援助 理解が同時に可能か、だが。負担が多すぎるようだ。壁に関与していると君は忘れるのだ、税制改革を理解することを。そして誰の助けにもならない。

6

それで我々がこの一度の人生で経験してもいいとされている恍惚状態とは何だろう

この世に在ってうまくやっていると誰もが言う時に。君が自分の人生を捧げるべきなのは、改革にしろか、それとも自分の人生を理解することにしろか。

種類の異なった人々が生まれるのだろうか、助けるための人 関与するための人、人生を理解するための人、といった具合に。君はそのどれなのか、また、どうしてそうだと分るのか。君は狂っているだからそれが分らない、とある人は言い、また別の人は言う、君は眠っているのだと。

私自身には私は正気で目醒めていると思われる、それで私はどんどん進む。恐らく根本的な型の解決が、「自然の中での喪失」、「神秘的な宗教」あるいは「性の激発」が、我々には必要なものなのだ。だが親愛な文明よ——誰が木登りをするために劇場へ行くことを諦めたいと思うだろうか。誰も君にそんなことを望みはしない。

この黙想はどこから始まったか（卓傳の交響楽団からだった）を忘れないようにしよう。

それは生きるという問題であって、第一級のものになることではない。それでもそういう第一級のものと同じ位多くを成し遂げたいのだ、そして一つ

の背後にはそういったあらゆるものが列をなして存在するのだから、更にもっと多くを。

7

人々は、同道しているあらゆる人々を見ている、
彼らは穏やかだったり、不快だったり、孤独だったり、退屈だったり
愉しんでおり、満足しているのだ、適切な
文明であれば こういう人々皆に役立つのだということに
そして確かに食物は 飢えた人々には役立つだろうし
制限は 強欲な人々には課されねばならないし
銃器は 攻撃的な人々からは取り上げねばならないし
薬は 病人に与えられねばならないし
といった具合で、毎晩夢を見る（と思われている）
人々は各々 沸き立つ思いと黄金の好奇心を
持っているものと思われよう。そういうものはどのように組織すればよいのだ
ろうか
こういう人々が各々
それを所有して幸せであり、彼と一緒にいて、彼女と、私と、一緒にいて、幸
せであるようにするためには
そして我々もまた、そしてそれが、全てが、そういうものと共にあって幸せで
あるためには。そうなれば理想の日となるう——
どうすると可能なのだろう、誰もが 自分が主人公で、幼芽は毎日そこに生ず
るのだと感じられるには。

8

異なった文明が同時に存在している、
インディアンが一方で生みの苦しみのさ中にあれば、サムライは他方落ち目に
あり、
畜生と罵っている実業家が鉱山におれば、何か農場の庭文明のような
ものを想わせる小文明があり、漁師と網と舟の文明がある、
それから君自身の、及び、私自身のものに戻ると、あらゆる

効率 善意 弱点 及び 俗物根性

不確かさ 回復 むしろ長い生涯 どうしようもない

熱狂の爆発 街中の優しい改革者たちが

今日私が丁度窓から見たようにあり、そしてここに暴動鎮圧警察が現われ

そして中に坐っている人々がいて 私が外に出てこの真只中にいるべきかどうか
分からないでいる。

交響楽団が演奏すると 誰もが昂揚してゆき、種々な

数の存在となる人々の中の一人となり

同時に夢みるのだ 存在しているのだと、

文明というものの常で 我々が話す時に文明は出現するのだ。

9

折れない背になるために、また、存在する必要のない

不思議なものを憎むために、私に授けたまえ おお アテナ女神よ

バラの花々を ガンマ・グロブリンを——しかしながら祈りは

私には一度も真面目に考えられなかったことだ（と私は思う）が。

答は捉えどころがないままその作業は進行してゆく

長い間、それで我々は自分の人生が 他の事柄の間で続いていって

欲しいと思う 答が見つかるものと望みながら。尤も我々には分っている

80歳の答は18歳の答にはなるまいと。

道中で 我々は物事に資格を与えるのだ、我々は更に

自らの状況、及び他人の状況を複雑にし

時には前より賢くなり、親切になり、そして多分余り興奮しなくなり

（確かにそうだ）、そして自らの錯覚から抜け出し（時々だが）、そして

周囲を見回して言うことは出来る、おお！ そうなのだ！と、だが、大抵は時間
がなかったり

何事にしる（時には——恐らく断片——もしそうなら驚くべきことだ！）変化
させられる力がなくて——それでこと切れるのだ 我々は。

Ⅱ. ケネス・コッホ小考

Kenneth Koch (1925—) は、言葉を超現実主義風に駆使しながら、機智とユーモアに溢れた洗練された作品を書く詩人として出発したと言ってもよく、“Desire for Spring”「春望」、 “Permanently”「永久に」、 “You Were Wearing”「君は着ていた」、など⁽²⁾、特に忘れ難い名作である。

1959年に上梓された喜劇風の長篇叙事詩 *Ko, or A Season on Earth* 『コウ、即ち地上の一季節』は、主人公が日本人の野球選手で、その名前は作者が自らの名を縮めたものだった。この作品は、副題が示すように、その地口の伝える意味——ベース・ボール（基礎・土台+球）のシーズンが地球を包含する——と、ランボオの『地獄の一季節』の裏返しとから、作者が、自分の詩の世界を自ら定義し、擁護した⁽³⁾ ものだった。「君は着ていた」も、詩人誕生の出発点を題材・主題としたものと看做せようが、コッホは早くから、詩そのものを詩で追求し、鋭い感性の漲る認識詩を書き続けてきた。

1975年になると矢継早に、認識詩の大作を詩誌に発表し、それらを収録した詩集 *The Art of Love* 『愛の術』(1975) を公刊した。その中の “The Art of Poetry” 「詩という芸術」⁽⁴⁾ は、全12連、373行の力作で、「詩の創作行為に関わる全ての知識」を備えたものとして書かれた詩論詩であった。

詩美の創造には、数時間の高度な集中が必須であるから精神の健康が必要なこと、作者の見当はずれに気付いて注意してくれる友人を持つべきこと、自分だけの独創的な様式を見い出して所有すること、新たに外国語を学ぶ必要、実生活と経験の詩作にとっての意味、自分の本当の感情を見い出すには思いやりと興奮とを指針にして努力に徹すべきこと、詩はそれ自体で完結しているべきものであることなどを、抒情詩、叙事詩、詩劇、押韻、現代性、無意識の部分、などにも言及しながら、具体的に説いたものであった。自作の詩が佳作かどうかを見極めるための「10法則」の呈示や、改訂の必要に触れながら、改訂作業と靈感とをそれぞれ異なった型の女性に譬えて説く糸りなど誠に興味深く、ひょいひょいと持ち出される突飛な譬喩に惹かれながら、読者は、詩も人生同様一回性のものである、という最後の主張に到るまで目を離せないだろう。

“On Beauty” 「美について」⁽⁵⁾ も、全17連411行の長篇で、美という主題について当時の作者の知れる限りのことを詩で語り尽そうとした認識詩で、美論

詩である。

「美は時折、美しい女性の姿で／現わされるが、この擬人化には得心がゆく／人が眼にするあらゆる美しいものの中で、おそらく／美人が最も感動を掻き立てることを思えば。彼女を見詰めていると、／帆船が入江をさっと風にさらわれてゆくように人は欲望にさらわれ、肉体が興奮すると／美は一層明白となる、人が目覚めていようと眠っていようと。」⁽⁶⁾と、実に美しく始められるこの詩は、最初のピリオドまでのこの冒頭の6行中、一行目と六行目の行頭に“Beauty”を配し、中に形容詞“beautiful”を三回巧みに使用し、入江を風にさらわれてゆく帆船を譬喩に使う、目の醒めるような出来栄である。

人が見る最初的美で「美」と意識するものは、母親の顔だという人がいるが、と続けられながら、美しい島々の点在する地中海へと読者を導き入れてゆき、次々に、美ははかないものだが、だからこそ守るに値いするのだということ、去来常なきものが美の特質であること、美の存在は見る者の観方如何に依ること、眼と自然との間の均合いが重要なこと、自分の眼同様自分自身の文化を信用することの大切さ、自然さと異様さとの組み合わせが美だということ、などを、例にして例の如く、時には奇抜な譬喩を持ち出したり深い学殖を發揮した言及を折り混ぜながら主張する。

要するに、美は、異様に且つ自然に見えながら、また、束の間のものであり、人間の眼の大きさに順応し、時の経過と共に濃縮液になり、独自のものらしくなるものであり、美とは何かをしようという衝動を惹起する飽くことなき欲求誘発者だと説き進めるのである。美に関する種々の疑問点も認めながら、美を、この世で最も甘美なものの一つだと述べたこの詩そのものが、「美」の美事な具現化の一つであった。

美しいものの中では美人が最も感動的だと、「美について」を説き始めたコッホが、「愛」についての認識詩を書くのは当然だろう。詩集『愛の術』のタイトル詩「愛の術」“The Art of Love”はこの作者によって書かれるべくして書かれたものであったが、この、全4部総計654行の詩は、それにしてもまた、特異で衝撃的な作品であった。

「あなたはそれについて何を知っているか」“What do you know about it?”と副題にある通りで、全く、我々は<愛>について何を知っているだろうか。改めて問われると返事に窮しよう。

「女性の愛を勝ち得るには 人はまず発見しなければならない／どういう手柄が彼女らを感動させようかを、 どういう感情を／抱く生活を彼女らは最も喜

びそうかを。それから／人はそういう事柄を見つけ　そういう感情を惹き起すべきだ」⁽⁷⁾と語り出すこの詩は、直ぐに、「勿論、困難なのは／女性の愛を勝ち得ることについて／どう語るかであって愛についても話すことではない」⁽⁸⁾と言っているところからも判るように、この〈愛〉は、性愛に主に関わる。だからといって、胸が殊の他美しく見えるから裸の恋人を後手に縛って彼女に縛めを抜け出させようとしてみよう、などと大真面目に書き進められると、読者は衝撃を受け、戸惑うのである。両手首を両足首に縛って車のように転がしてみると、官能を掻き立てる美しさが得られるとか、女性をベッドに釘付けにするとか、紙の人形のように見えるような動きをさせてみるとか、深海の喜び (a deep-sea joy) を与えてくれる体位をとらせるとか続けられると、サドの詩化版かと目を覆ったり瞳らされたりするかも知れないが、実はそうではない。

秀れた恋人であるためには、秀れた役者である必要があるから、少なくとも一度は試みてみよう (To be a great lover, /However, you must be a great actor, so try, at least once.) と説くところからも判るように、誰もが優しさを好むにしろ、優しさだけでは全てというわけにはいかない (tenderness cannot be all/ Although everyone loves tenderness.) 〈愛〉の機微に触れているのである。性愛が全てに違いない、街路ではなく都市であり、都市ではなく国であり、宇宙であり、世界だから——この何でも無いような面白い譬喩に注意！——君の〔性愛〕もそうなるようにせよ、銀河にさえるように、その全てを意識的に且つ無意識的にせよ、それが愛の術だ (Make yours so, make it even a galaxy, and be conscious and unconscious of it all. That is the art of love.) と第一部は結ばれている。第二部以降も、愛の問題では旨くいこと、成功 (success) が最も重要だからと、その「成功」が得られる方法が、どこまでが真面目でどこからが巫山戯ているのか判然としない書かれ方で説かれてゆく。愛には気力、活力が重要だと言いながら、高蛋白の食物が精力をつけるには相応しい、精液は全て蛋白質だから、などと、涼し気に言って、具体的に食品を挙げてみせる。(Oysters, clams, steak, anything with a high protein content/Is good for one's sexual powers, since semen is all protein;)

愛の場合にも自然さが最善 (naturalness is best) と説き、女性を惹き付けるのには巧みなお世辞が有効と言ってそれを分類してみせ、年齢差のある男女の愛については、「年齢均等法」“Age Averaging”を提唱し(例えば、年齢が半分の女性の愛を勝ち得るには、自分の年齢と彼女のそれを加算して二で割

り、その数字の年齢の男として振る舞い、彼女にもそうしてもらうのがよい、と言う)、年輩の男が年若い女に決して言ってはならない禁止条項10カ条を挙げるなど、如何にもこの作者らしい。結局、愛に取って替るものや、愛に匹敵するものは皆無なのであり、愛の身体にとっての意味は、魂にとっての宗教、頭脳にとっての哲学のようなものだから、愛は宗教、哲学と同じ地位を占める重要なもので、愛がなければ、我々は半分しか生きていないようにみえるのだと結んでいる⁽⁹⁾。

ケネス・コッホにとっては、詩も美も愛も同じものだといってよいだろう。いずれも、人間の「心」に関わるものである。本稿で先に拙訳を試みた「我々の心」“Our Hearts”連作が、彼のその後の重要な作品である所以である。

次に出た、詩と散文の結合詩集とも目される *The Burning Mystery of Anna in 1951* 『1951年のアンナの燃える神秘』(1979)に、この連作は収録された。

この作品、[1]から[9]へと、連続して詩想が展開してゆくので、9篇のソネット([7]だけが15行詩になっているのだが)の連作形式で書かれた一篇とみなしてもよいものである。

交響楽団が演奏する『愛』という曲(この曲名が「愛」であるところが意味深長である。『愛の術』の作者の面目躍如としていよう)を聴くと、心が躍動して自然に踊り出したくなるだろうという心の在り方から、この作品の主題は繰り展げられてゆく。こういう心の沸き立ち(the seething)が、偉大な芸術を可能にする、と始まるのだから、人間の心と共に、芸術をも、この作品は黙想・考察の対象にするのである。[2]で明らかになるように、新旧交替しながら連綿と続いてゆく歴史、文化、文明の中で、考察が進行する。[3]のヘロドトスに不意に言及したりして、「祖父母を食べたりしない」倫理に、軽いブラックユーモアを見せ、「愛」に至高の価値を付与するかも知れない<我々>に想いを寄せるところなど、この作者らしいが、ひょいと最後に、日没の教会に目を移させるこの軽妙な転換も、コッホらしいところであろう。[4]の「自然の過程で創り上げられてきた神秘」(Mystery that has been built up by a natural process)である「心の沸き立ち」を、何とか説明しようとする試みが、この一連の一つの目的であろう。「軽快な絹のパンティ」云々などの、軽い官能的なイメージも、「誰の足元にも犬がいる」という唐突な譬喩も——その譬喩は[5]で、「説明」は「犬」だ、と継続される——、コッホの面目そのものである。

唐突な衝撃は、一連の到る所に現われて、読者を緊張させる。太陽は洗濯物入れの籠に (The sun is a basket of wash/Let down for our skin), 微生物が現金に (germs are all around us like cash.) [4], 「説明」は、「双眼鏡をもった青年」(a languishing lad/Lanky with lurid binoculars) に [5], 譬えられる。「木登りをするために劇場へ行くことを誰が諦めるか」(Who would like to give up theater for climbing up a tree?) などの詩句 [6], ガンマ・グロプリンの出現, 「80歳の答は18歳の答にはなるまい」(the answer of eighty will not be the answer of eighteen) [9] など、典型例であろう。

「最大の計画は、参加し、援助し、理解することだ」(The greatest plan/Is participate, aid, and understand.) [4] とあるが、ここが、全篇の眼目であろう。人生という長い展望の中で、世界の種々様々な文明の中で、人間の心の、〈感動〉と、〈芸術〉と、そして人間の〈生き方〉とを、この一連の作品は黙想・考察したものであろう。

自ら新しい〈文脈〉“context”を創り出して、自らの〈発見〉を盛り込む新しい象徴詩を、この詩人は目論んでいると見られる。「我々の心」も、そういう彼の重要な成果である。

注

- (1) 原綴は“Cho Fu”なので「卓傅」とした。他に人名としては「傅」に替るものに、「福」、「甫」が考えられる(向嶋成美, 松本肇両氏の教示に依る)。实在の音楽家に今のところ該当者が見当たらないので、曲名『愛』“Love”と共に仮空のものではないかと推測される。
- (2) この3篇は拙訳・紹介済み。『楡』ELM Vol. 4, No. 1 (1986年1月号) 所収「現代英米詩覚え書 (15)」pp. 35-37.
- (3) Richard Howard, *Alone With America: Essays on the Art of Poetry in the United States Since 1950*. New York: Atheneum, 1980. p. 332.
- (4) *Poetry* (1975年1月号) 初出のこの全篇の拙訳は「英文学風景」第5号(1982年12月25日発行), 同第6号(1984年3月25日発行)に掲載済み。
- (5) *Poetry* (1975年4月号) 初出のこの全篇の拙訳は「文学について」終刊号(1985年7月1日発行)に掲載済み。
- (6) Beauty is sometimes personified
As a beautiful woman, and this personification is satisfying
In that, probably, of all the beautiful things one sees
A beautiful person is the most inspiring, because in looking at her,
One is swept by desires, as the sails are swept in the bay, and when the
body is excited

- Beauty is more evident, whether one is awake or asleep.
- (7) To win the love of women one should first discover
What sort of thing is likely to move them, what feelings
They are most delighted with their lives to have; then
One should find these things and cause these feelings.
- (8) ...of course the difficulty
Is how to talk about winning the love
Of women and not also speak of loving—
- (9) ... There is no
Substitute for or parallel to love, which gives to the body
What religion gives to the soul, and philosophy to the brain,
Then shares it among them all. It is a serious matter. Without it, we
seem only half alive.

本拙稿を、この三月限り本学を退官される 岩元巖教授に 捧げる。